ひ ろ し ま レ ポ ー ト

第34回広島平和記念式典等参加事業

松　　本　　市

広島の平和記念公園内に設置されている「平和の灯（ともしび）」

「平和の灯」は、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という趣旨で１９６４年8月１日に設置され、全国１２宗派から寄せられた「宗教の火」と溶鉱炉などの全国の工場施設から届けられた「産業の火」が、１９４５年8月6日生まれの７人の広島の乙女により点火されました。

目　　次

○ヒロシマの願い

○レポート

平和のためにすべきこと	清水中学校２年	原　朋彰	‥‥ １
７９年前からのメッセージ	鎌田中学校２年	輪湖翔多	‥‥ ３
みんなが知らない広島	丸ノ内中学校２年	手塚　航	‥‥ ４
平和を願って	旭町中学校２年	辻　結貴	‥‥ ６
広島平和式典へ参加して	松島中学校２年	丸山珠奈	‥‥ ８
広島を訪れ学んだこと	高綱中学校２年	遠藤咲絵	‥‥ １０
広島が訴える平和と私にできること	菅野中学校２年	牧野朱音	‥‥ １１
平和と幸せを願って	筑摩野中学校２年	関　大地	‥‥ １３
広島を訪れて	山辺中学校２年	土屋春太郎	‥‥ １４
忘れてはならないあの日の惨劇	開成中学校２年	田村芳之助	‥‥ １５
平和じゃない時間	女鳥羽中学校２年	赤羽咲月	‥‥ １６
ヒロシマを繰り返さないために	明善中学校２年	堀越元太	‥‥ １７
平和に向かって	信明中学校２年	泉　和哉	‥‥ １８
僕たちのするべきこと	会田中学校２年	小口結翔	‥‥ １９
平和になるために	安曇中学校２年	髙田希星	‥‥ ２０
平和は本当に当たり前？	梓川中学校２年	上嶋杏菜	‥‥ ２１
曾祖父の思いを受け継いで	波田中学校２年	スミス　輝	‥‥ ２３
被爆者の方のお話を聞いて	鉢盛中学校２年	中尾一華	‥‥ ２４
戦禍を知る	信大附属松本中学校２年	足立礼実	‥‥ ２５
私たちの使命	才教学園中学校２年	花岡麻貴	‥‥ ２６
世界平和の実現	松本秀峰中等教育学校２年	髙野ゆあ	‥‥ ２７
過ちを世界が繰り返さない為に	松本国際中学校２年	横山太一	‥‥ ２８
広島訪問	松本ユース平和ネットワーク	照屋規翔	‥‥ ２９
７９年の時を超えて、記憶を未来へ繋ぐ	松本ユース平和ネットワーク	滝沢　葵	‥‥ ３１
平和とは	松本ユース平和ネットワーク	二木琥央	‥‥ ３２

○写真記録　‥‥ ３３

○広島平和記念式典

　平和への誓い　‥‥ ３６

　平和宣言　‥‥ ３７

○参加者一覧　‥‥ ３９

○旅の日程　‥‥ ４０

※掲載のレポートについては、できるだけ本人の作文を尊重しています。

ヒロシマの願い

The Prayer of Hiroshima

「原爆(げんばく)に会(お)うた」と、被爆(ひばく)した人たちは言います。 一瞬の破壊、あまりに多くの死、大切な家族さえ救えなかった苦しみ――言葉では表現しきれない出来事に「出会って」しまったからでしょう。あの８月６日とそれに続く日々は、「思い出すことさえつらい」ことです。 被爆者はその思いを乗りこえて自分の体験を語り伝え、 再び核兵器を使ってはいけないと、広島の地から訴えてきました。
「ヒロシマ」は世界共通の願いと結びあい、 平和を実現したいといつも願っています。

Hibakusya say simply, “I met with the A-bomb.” Perhaps they use this expression because the event they “met with” defies descript~~ion~~ an instant of massive destruction, mind-numbing death and injury, and the grief of watching helplessly as family members, relatives, friends, and neighbors died in agony. They also say, “It’s painful even to remember.” The A-bomb witnesses have overcome that pain and are passing on their experiences of that day. They feel duty bound to tell the world why nuclear weapons must never be used again.
The continual prayer of the A-bombed City Hiroshima is to unite humankind toward our common goal, genuine and lasting world peace.

（広島平和記念資料館　収蔵品より）

平和のためにすべきこと

清水中学校２年
原　朋彰

私は今月５日から７日にかけて松本市の代表として広島にいき、広島平和記念式典に参加しました。そして、広島平和記念資料館で原爆の悲惨さと核兵器の実態を知るという貴重な体験をしました。

私が見た広島はビルが多く立ち並び、「７９年前、ここが本当に焼け野原だったのか？」と思うほど街は栄えていました。ここまで街を復興させるのに、広島の人たちにはどれほどの努力と苦しみがあったのだろうかと思いました。

見学した平和記念資料館にあったのは、被爆前と被爆後の広島の写真、被爆して亡くなった人の遺品や発掘された大量の遺骨、大やけどを負った子供の写真など、まさにそれは「地獄絵図」でした。私は、この地獄絵図がとてもこの世のものとは思えないほど悲惨なものだと感じました。

被爆者の方から、原爆によって多くの日常が奪われたこと、救いを求める声が周りからたくさん聞こえたこと、戦争というものがどれほど恐ろしいものかというお話を直接聞き、８月６日のあの時、一瞬にして多くの命を奪った原子爆弾に７９年たった今でも苦しめられている人がいることを知りました。そして、改めて自分たちが今、平和な暮らしを送ることができていることへのありがたみや大切さを感じました。

今もあの時の原子爆弾を超えている核兵器を持っている国は９ヶ国ありますが、アメリカやロシアは核兵器の保有数を減らしています。一方で、一部の国は核兵器保有数を増やしています。どのような意図で、その一部の国は核保有数を増やしているか？我々はそこにも目を向けていく必要があると思います。

８月６日には江田島海軍兵学校を見学しました。

江田島海軍兵学校には、東郷平八郎の胸像やそこを卒業した著名人についての解説などとても勇ましいものがありました。また、各都道府県出身の軍人の遺品や遺書が展示されていました。

特に印象に残ったのは、国から命令を受けて特攻していった青年たちの名前・出身地・当時の年齢・住所・配属部隊・戦死した年月日と場所などが載っているファイルです。私はこの大勢の若者が国のために戦死したという事実を目の前にし、今の日本の平和は、彼らの犠牲の上に成り立っているということに心が痛むとともに感謝の気持ちを抱きました。

もし、現代で「私より少し年上の人たちが国のために死ぬことになったら」と想像すると心が耐えられないと思います。

この広島訪問で、平和記念資料館では原爆の

悲惨さを、江田島海軍兵学校では戦地へ向かった軍人が残した遺書など、戦争が引き起こす悲劇を目の当たりにしました。

　戦争を完全になくし恒久的な平和を築くことは、歴史的価値観や文化的価値観の違いなどがあるため非常に困難だと感じます。しかし、平和に向けて一歩近づくためには、今、戦争している国の状況やなぜ戦争に至ってしまったのか、そして解決策はないのかなどを、日本国全体で考える必要があると思います。また、日本はその戦争している国同士の仲介国としてお互いの事情を理解し、それに対する解決案を見出すことができれば、平和に向けて貢献できるのではないでしょうか？

　そこで私たちの世代は、様々な情報に触れ、そして学び、平和についてよく考え行動していかなければならないと思いました。

７９年前からのメッセージ

鎌田中学校２年
輪湖　翔多

学校の社会科の学習では知ることのできない事実が、広島には残っていました。原爆ドーム、平和記念資料館、そして被爆者の人々。それらが僕たちに伝えてくるのは核兵器の悲惨さや、当時の人々の想いです。

僕は今回の広島平和記念式典参加事業に出席して多くのことを考えました。

被爆者の山瀬さんのお話を聞いたとき、僕は原子爆弾の恐ろしさを初めて知りました。お話の内容は学校の授業で学習することよりも詳しく、山瀬さんの想いが伝わってきました。原子爆弾が投下された８時の広島には１９～３０歳のアメリカ兵の方も被爆し、２３人のうち１２人がなくなったそうです。そのほかにも、広島市内で学徒動員された８２００名のうち、６３００名が被爆してなくなったそうです。核兵器が無差別に人の命を奪ってしまう、恐ろしいものだと感じました。

広島平和記念式典ではこども代表の平和への誓いの発表に感銘を受けました。

「今もなお、世界では戦争が続いています。７９年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです」

それを聞いたとき、本当に自分達は平和な環境で生活をできている、と実感できたとともに、世界のどこかに、７９年前と同じ思いをしている人がいるという事実にショックを受けました。

いま世界では核兵器を保有している国がいくつもあります。広島の悲劇がまだ起こる可能性があるかもしれないということです。が二度と広島の悲劇を繰り返してはならないと今回強く思いました。

今回の広島平和記念式典参加事業に出席して、自分のまだ知らない事実を知ることができたので本当に良い体験ができたと思います。まだ自分が知らないことは山ほどあります。今回学んだことをより多くの人に伝えていきたいです。そして、今ある平和に感謝しながらこれから生活していきたいです。

みんなが知らない広島

丸ノ内中学校２年
手塚　航

８月６日８時１５分、広島の平和の鐘が式典会場に響き渡りました。暑い、暑い、真夏の朝でした。

７９年前のこの瞬間、広島の上空６００ｍで原子爆弾がさく裂しました。人々の平和を一瞬で消し去った０．２秒間でした。ある人は言いました。「あれは地獄だった」と。鉄をも曲げる１，０００度の熱線、人を吹き飛ばした爆風、そして、今なお人を苦しめている放射線。これらが当時広島に住んでいた、皆さんと同じくらいの子供達、大人達、生まれたばかりの赤ちゃん達でさえ殺しました。この原子爆弾で１４万人が、その年の終わりに亡くなりました。

想像してみて下さい。あなたは、学校にいて朝の読書をしています。次の瞬間、強烈な閃光、体を溶かす熱線、体を吹き飛ばす爆風、その時にはわからずとも、体を蝕（むしば）む放射線。爆心地の近くにいた人は即死、死ななかった人々は、肉は焦げ、体中が熱かったでしょう。爆心地の近くには川があり、人々はその川の中に入り、そして死んでいきました。ガラスの近くにいた人にはガラスが突き刺さりました。平和記念資料館でガラスが刺さった壁を見た時、それはまるで、弾丸に打たれたかのような跡でした。原爆ドームの姿は鉄筋が曲がりくねり、鉄骨は建物を刺すように飛び出ていました。それはかつて、たくさんの人々を感激させた建築とは思えないほどむごい姿でした。

７９年前、広島では建物は粉塵（ふんじん）と化し、そして１４万もの尊い命が、いえ、さらに多くの命が失われたのです。その後、広島の人々は、いろいろな物を生きがいにして、広島の街を、広島の活気を取り戻そうとしました。しかし、まだ広島の原爆は続いていました。ある日急に髪の毛が抜け、血を吐いたり、体調が著しく悪化しました。そう、放射線障害や、それによる白血病です。それは当時、何もわからない原爆の後の病気として、恐怖による差別へと変えました。いじめや、病気により休みがちなことをぶらぶら病と言って差別の対象としました。差別され続けた被爆者は、原爆によるけが、病気などでの苦しみに加え、二重の苦しみを味わったのです。しかしこれは、最近にも起こった話です。東日本大震災で、福島第一原発事故が起きた時に、放射線がうつるからとサッカーチームが相手選手に嫌がられた、というまるで広島の二の舞のようなことが起こったのです。

いま世界には全人類を数百回も滅ぼせる量の核があります。未だに、核兵器を減らすと言いながら、５月に核実験が行われたばかりです。核兵器をなくせば消える広島の「平和の灯」を、人類は消さなければなりません。

広島は今とても栄えています。新幹線が開通し、高速道路も発達、多くのお店が立ち並んで

います。僕は広島から帰るとき、７９年前のあの絶望的な状況から、ここまで復興させた人の力はすごいと思いました。僕は歴史が好きなので、広島の原爆投下からの復興の歴史について積極的に知ろうと思います。皆さんも、まず現実と向き合い、例えば友達と少しでいいので、この話題を話したりなどしてみてください。そうすることで、平和へ一歩近づくのです。

平和を願って

旭町中学校２年
辻　結貴

私は最初、広島へ行くことが少し怖いと感じていました。写真や資料を見て、夜眠れなくなってしまうのではないかと思ったからです。参加前「この世界の片隅に」という本を読み、心の準備をしてから出発しました。

私は、この学習で特に心に残った２つのことについて話したいと思います。

１つ目は、原爆の怖さを経験した山瀬閏子さんの話です。山瀬さんは当時８才でした。原爆が落とされた時、とっさに母が守ってくれて、背中にガラスが何本も突き刺さっていたそうです。私が山瀬さんの立場だったら、母にしがみついて泣いてしまうと思います。

外にいた人は、皮膚がはがれ、まるでジャガイモの皮をつけているようでした。人々は手を前にして歩かなければ、皮膚が垂れて落ちてきました。ジャガイモの皮の一言で、私は状況が一瞬で呑み込めて、そのあまりに悲惨な状況に驚きました。山瀬さんは農家をやっていたので、その人たちにキュウリを切って、シップ代わりに貼ってあげたそうです。それで少しでも多くの人を助けられたのだと思います。

新聞紙を破り、水で溶いて飲むとしばらく空腹がしのげる、という話はとても衝撃的でした。生き残るためにとにかく何でもお腹に入れる。食べ物を選べず、必死に生きる様子を聞いて、「飢え」という言葉の本当の意味をようやく知りました。

皆さんは、時間がなくてご飯を食べなかったり、お腹がいっぱいで残すということはありますか。私たちの当たり前にある日々の食事は、最高に幸せなことだと痛感しました。

心に残ったことの２つ目は、平和資料館で見た、戦争前後の風景や老若男女の写真についてです。ケロイドや、全身やけど、目の治療の様子、目が垂れ下がってしまっている絵など、当時の人々の痛みや叫びが今にも聞こえてくるほど、残酷な写真で心が苦しくなりました。

水が欲しいと口を開けた人の写真は、原爆の悲惨さを象徴する一枚でした。

放射線入りの黒い雨は、死へ追いやる水。それがどんなに人々を苦しめたのか、想像できました。

対照的に、原爆投下前、広島の平和な写真がありました。その中の一枚は、今の自分と重なる姿があり、しばらくじっと見つめました。それは水泳大会でまさに今、選手たちが飛び込もうとしている瞬間の写真でした。

私は水泳をやっていて、プールに飛び込む瞬間、一番幸せに感じます。７９年前の選手たちも、私と同じようにわくわくしていた瞬間があったのです。もし自分の未来が奪われたら、と思うと悔しくて悲しい気持ちになりました。

何の罪もない日本の一般の人々を殺し、平和を

奪われた広島や長崎。誰一人として、どの国でも、地獄のような日々を二度と繰り返してはならない、と強く思います。

私が考える平和な世界は、皆が笑顔で楽しく暮らすことです。その幸せが続くように、周りと協力したり、戦争を正しく知ること、怖がらずに皆が知る大切さを伝えたいと思います。来年、修学旅行で広島へ行きます。より成長した自分で、また広島を見たいです。

広島平和式典へ参加して

松島中学校２年
丸山　珠奈

「あの時の広島は地獄だった」これは私が広島平和記念資料館や現地でお話を聞いて一番心に刺さった言葉です。今年で戦争が終わってから７９年が経ちました。まだ日本で戦争が終わり７９年しか経っていません。しかし原爆のことや戦争のことについて知らない人はたくさんいます。

そんな中、私は実際広島で被爆を受けた方のお話を聞くことができました。

山瀬さん当時８歳。家族は８人の内６人が被害に遭いました。祖母と次男は疎開しており被害はなく父、母、長男、妹、弟、山瀬さんが被爆しました。原爆が落とされる数十分前、１９４５年８月６日午前７時３１分警戒警報は解除されており普段通り朝礼が８時に始まり、仕事が始まる８時１５分突然ピカ、ドーンという音と共に強烈な爆風ととても強い光線が広島市を襲いました。

アメリカ軍の目標として相合橋という原爆ドームからのすぐ近くの、Ｔ字の道路に原爆を投下するつもりでした。原爆ドームから８００ｍ離れたところに原爆が落とされ、あたりは薄暗く大きなキノコ雲、たくさんの人の「助けて」といううめき声、腕や体中から噴水のように血が流れ、火傷で皮膚が風船のように膨れ、皮膚が垂れ下がり、腕やからだがボロボロの人や建物の下敷きになり動けない状況の人々、原爆が落とされ怖い、恐怖という感情より逃げないと、必死に生きようといろんな人に助けを求める人々。まさにその時の広島は地獄でした。

笑顔があふれていた広島を地獄へと変えた一発の原爆（リトルボーイ）は地上から６００ｍ離れたところで爆発し、３，０００度から４，０００度という高温と爆風で辺り一面を焼き尽くしました。原爆が落とされたところから２ｋｍ以内は全焼し、焼け野原になってしまいました。

戦争が終わり広島へ帰ってきた人は、「海が見える」と言いました。

すべての建物が崩れ、さら地になった広島市からはきれいに海が見えました。町にはなくなった人がそこら中に倒れていて異臭がして、元の緑豊かな町はなくなったのです。

元々広島市にいたのが３５万人で１９４５年１２月末には約１４万人の方々が亡くなってしまい、いまだに行方不明の方がいます。骨も見つからず唯一残った衣服や遺書、写真や大切にしていたものが広島平和記念資料館に残されていました。

そして多くの人が亡くなった理由の一つが原子爆弾に含まれる放射線というものでした。そのころの日本は今よりも医学が発展していなかったため放射線での病気なのかがわからなく死亡診断書には戦死、被爆死と書くしかな

かったのです。

放射線による影響はものすごくて放射線を大量に浴びてしまったことで亡くなったり、少しして被害があったところに行き，残っている放射線を浴びてしまったりしたことで数年後に白血病、がんで亡くなる方が多くいました。そして原爆症という人々を苦しめる大きな山がありました。

原爆症は普通の爆弾と桁違いの大量の放射線により、歯茎や鼻から血が止まらなくなり、高熱が続き死の斑点という赤い点が顔や体にできて亡くなってしまうというものでした。

原爆が落ちた数か月後、数日後には原爆症で亡くなる方が多くいました。

放射線により今でも後遺症に悩まされている被爆者の方は沢山います。直接被爆にあっていなくても死因がわからず家族、友達が亡くなってしまっている方も沢山いて、つらい思いをしているのです。原爆は人々の幸せやよりどころも奪ってしまいました。

いまだに他の国では核兵器を持っている国が多々あります。また広島、長崎に続きこのような体験をする国が出てきてしまうかもしれません。広島、長崎に落とされた原爆より今の核兵器は強力になっています。広島平和記念資料館を実際に見ていろいろな感情が沸き起こり言葉に出せなかったです。当時経験した人にしかわからないものですが、私なりに被爆者の方の顔を合わせてお話を聞き、当時そのままの姿をみて核兵器や戦争の怖さを感じました。生きたくても生きられない辛さ、命の重みを感じ、けがもなくご飯も食べることができている私たちはとても幸せだと思いました。過去の日本があるからこそ今の私たちが生きている。核兵器を使ったり戦争をしたりしても誰一人幸せにはなれません。平和への一歩として小さいことでもトラブルが少なくなるようにひとりひとりが相手の話をよく聞き理解して、思いやること。決して忘れてはならない歴史の一つとして過去として忘れてはいけないことが平和だと改めてこころに誓いました。

現在被爆者の方の平均年齢は８５歳以上となり、戦争の悲惨さを語って頂ける方も減ってきています。被爆者の方がいなくなってもいま私たちが戦争の悲惨さや核兵器の危険などを伝え続けて、日本から世界へ平和をつなぐことが大切なのです。

広島を訪れ学んだこと

高綱中学校２年
遠藤　咲絵

私は、広島を訪れる前は戦争のことについてテレビや学校の授業などでしか知っていませんでした。なので、今回の広島訪問はどれも衝撃的なことばかりでした。特に心に残っていることは２つです。

１つ目は、被爆者講話です。原爆が投下された直後、家の外に出てみると二の腕から血が噴水のように噴き出ている知人などがいたそうです。道には死体が転がっており、三輪トラックで運ばれる負傷者も力尽き、道に落ちていったそうです。講演してくださった方の家族は無事でしたが、その方のお父様にケロイドができてしまったそうです。ケロイドができた場所からは、悪臭がただよい、うじ虫がわいていたそうです。他にも私達と同じくらいの人達が戦争のために働くなど、今では考えられないことをしていたということを知り、胸が痛くなりました。当時を振り返り、「まさに地獄だった。」とおっしゃっていました。私は地獄を広島にいた老若男女が味わったのだと思うと鳥肌が立ちました。

２つ目は広島平和記念館見学です。壁一面にある原爆投下後の写真がありました。他には原爆が落とされた後の街の写真や絵がありました。全身にやけどを負った人や病院におしよせる人々の写真、水を求め川に来たけど力尽き川で亡くなった人々の絵など、どれもおどろおどろしいものばかりでした。中でも戦争で亡くなった方々の最後の言葉には心を打たれました。資料館は見ているだけでもつらかったです。

私は広島を訪れて改めて戦争や原爆のおそろしさを感じました。原爆が落とされた国は日本だけですが、今すぐ使える核兵器は世界中に沢山あります。未来を少しでも明るくするには、一人一人が核兵器や戦争に対する意識を変えることだと思いました。そのために、私は広島に行って感じたこと、学んだことを人に伝えていきたいです。そして、私ももっと戦争や核兵器について調べて探求していきたいです。そうすれば、未来が良い方向に進んでいくと思いました。

広島が訴える平和と私にできること

菅野中学校２年
牧野　朱音

１９４５年8月6日8時１５分、広島に一発の爆弾が落されました。その爆弾の威力はすさまじく、平和な時代に生まれ、平和な時代を生きている私たちには想像もできません。自分たちの国が戦争をしていて、自分たちの生活も厳しいところもあったのに、家族や近所の人たち、学校の友人など、たくさんの人たちで協力しあって苦しいながらも平穏に過ごしていた７９年前の広島の日常。

それを突然奪ってしまった一つの爆弾。

広島にあったはずの日常は地獄と化しました。

血まみれで街を歩く人々、建物の瓦礫(がれき)で立てず死を覚悟した人々、子供が息絶え絶望する親、自分をかばい重傷を負った親のもとで誰かの助けを叫ぶ子供。

これは私が、広島で知った原爆投下直後の広島です。それは私が知っていた広島とはまるで違うものでした。

私は、８月５日～７日に広島へ行き、広島の人々が訴える「広島の平和」について学びました。

初日である５日は、ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。なかでも一番印象強く残っていることは、被爆証言者である山瀬潤子さんのお話です。

山瀬さんは広島市の中心街から１キロメートル離れて過ごしていたのにもかかわらず、自分の家に爆弾が落ちたかと思うくらい、大きな衝撃だったそうです。自分のことをかばってくれた母の背中にはガラスの破片がささっていて、外に出るとパニックになっている人や助けを求める声であふれていたそうです。なかでも特に印象に残っている話は、山のほうから運ばれる人たちの話です。次々と山から運ばれる虫の息の人やすでに死んでしまった人が運ばれていたときき、生きたくて乗ったのに、その途中で死んでしまったということがとても悲しくて心が締め付けられるようでした

２日目は広島平和記念式典と平和記念公園の散策、江田島旧海軍兵学校へ行きました。平和記念式典で一番心に残っていることは、小学生の作文の朗読です。

「願うだけでは、平和はおとずれません。」この言葉が私の中で印象強く残りました。世の中には何か行動を起こしたくてもなかなか行動を起こせない人がたくさんいると思います。私もその一人です。その人たちに行動の大切さを気付かせ、行動する勇気をくれる、素敵な言葉だと思いました。

江田島旧海軍兵学校では、海軍兵学校時代に使われていた校舎と教育資料館の見学をしました。この見学で一番印象に残っていることは、同僚の飛び血がついたはおりです。背中や、

左袖に血がついていました。たくさんついていたし、同僚の血ということもあり、このはおりを身に付けていた人はその瞬間、絶望と悲しさが同時に襲ったのだろうと考えると、胸がいっぱいになりました。

３日目は、広島平和資料館の見学をしました。被爆前の広島から、被爆後の原爆をなくすための活動について資料まで展示されていました。そのなかでも特に記憶に残っているものは、人の骨が入った溶融塊と、被爆して全身大火傷を負い治療を受けている少年の写真です。

人の骨が入った溶融塊は、見たとき胸がしめつけるような悲しさもあったけど、最初は少しおどろきました。どうして体の中心にある骨と、鉄があわさっているのかが疑問だったからです。後に筋肉も熱線や熱風でなくなってしまったと気付いたときはすごく悲しかったです。

治療を受ける少年の写真は、見たときの私の立ち位置が写真の中の少年とちょうど目が合う位置で、その目がとてもつらそうで、苦しさを訴える目をしていたので、すごく心に残っています。

私は広島に行った３日間で、「広島が訴える平和」を現地で学ぶことで、知ることができました。それは

「核のない、もう広島のような悲劇が起こらない世界」

だということを知ることができました。

私は学んだことをふまえ、私にもできることを考えました。それは

「自分の心に余裕をつくり、困っている人たちに助け舟を出せるようになる」

です。戦争のない日本は、昔に比べたら平和かもしれないけど、まだ死んでしまいたいほどに苦しんでいる人がいるのも事実です。だから自分にも余裕をつくり、人助けをすることで自分が追い込まれるのではなく、みんなにも広げていければ、少しでも平和に近づくのではと考えました。

私は広島で学んだことを共有し、悲劇を伝えると共に、小さな平和への努力を積み重ねることを日々の生活に取り入れていきたいです。

平和と幸せを願って

筑摩野中学校２年
関　大地

僕は小さいころから原爆や戦争について興味がありました。なぜなら、曽祖父の戦争の体験を親からよく聞かされていたからです。曽祖父が助かったおかげで僕は生まれることができたのだと、今は亡き曽祖父に感謝しています。しかし、これらの話を聞いただけでは戦争についての実感が湧きませんでした。そこでこの広島平和記念式典参加事業に参加して、もっと戦争や原爆について知りたいと思いました。

８月５日から７日に筑摩野中学校の代表として、広島に行ってきました。

１日目に、ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。２日目の午前中に広島平和記念式典に参加し、そのあとに広島平和記念公園を、午後に江田島旧海軍兵学校を見学しました。最終日の３日目に広島平和資料館を見学しました。

僕の中で特に印象に残っていることが２つあります。

１つ目は広島平和記念公園の見学で、原爆ドームと原爆の子の像を見たことです。原爆ドームは、たった一つの爆弾によってできたとは思えないほど歪（いびつ）な形をしていました。これを見て、改めて原爆の恐ろしさを思い知らされました。

原爆の子の像の周りには数えきれないほどの千羽鶴が捧（ささ）げられていました。ここに毎日絶えることなくたくさんの人が折り鶴を持ってくるということを聞いたときに、それだけ多くの人が平和を願っているのかと、心を打たれました。

２つ目は広島平和資料館の見学です。館内には、原爆が落とされたときの様子を描いたイラストや、熱によって溶かされた鉄骨、そして亡くなった方の遺品や写真など、見ていて心が痛むものばかりが展示されていました。その中でも僕の心に一番刺さったのは「黒い雨」でした。

「炎から逃れる人々の上に
黒い粘り気のある雨が降りました。
傷ついた人々は雨に打たれながら、
乾いたのどを潤すため雨粒を飲み込みました。
この雨は放射能を帯びていました。」

僕はこの文章を読んで、言葉では表せないほどの悲しみに襲われました。当時黒い雨を浴びた人たちは、その雨に放射線が含まれているということさえも知らずに亡くなっていったのかと、悲しくなりました。

この２つ以外にも、たくさんの貴重な体験をしました。

今でも世界では戦争がおきており、兵士達以外にも関係のない市民達も無差別に殺されていると聞きます。僕はこのことが本当に許せません。

日本は原爆による被害のほかにも、空襲や特攻でたくさんの命が犠牲になりました。これは決して変えることができない事実です。だからこそ、今を生きている僕たちがこれらを記憶として残し、未来へと語り継いでいくことが大切だと思います。

広島を訪れて

山辺中学校２年
土屋　春太郎

僕は、８月５日、６日、７日に松本市の広島平和記念式典参加事業に参加させていただきました。

広島では３日間、全てとはいかなくても、少しでも平和について理解できるよう学んできました。

８月７日に広島平和記念資料館に訪れました。展示されていた数々の遺品、写真、絵のひとつひとつが原爆や戦争の悲惨さを強く示していました。広島に行く前は、戦争は人を殺し合い、人が殺されていくものだと思っていました。しかし、広島に行き、戦争は一人一人の命、生活、夢や希望、未来など全てが奪われるものだと学びました。

８月６日の平和記念式典には、被爆者や各国の代表など、いろいろな団体からたくさんの方々が参加しました。パンフレットの中にある参列国一覧を見たときこんなにものたくさんの国が広島に来ていることに驚きました。その国の中にも戦争に関わっている国がありました。８月５日にヒロシマ青少年平和の集いに参加したときに、被爆者の山瀬潤子さんは、

「ウクライナに色々な国が支援している。しかし、そういうことで国同士が仲良くなってはいけない。」

と語られていました。戦争が起きたら他の国も何らかの形で巻き込まれることになります。そうならないために、世界中で平和に対しての意識を高め、戦争を起きにくくすることが大切だと思いました。まだ、世界には一万発以上の核兵器があります。核兵器がある限り、いずれ使われる時がくるかもしれません。だから二度とあのヒロシマが繰り返されないためには核兵器を廃絶する必要があるのだと感じました

平和記念式典の中でこども代表の小学生が平和への誓いを言いました。その中に「願うだけでは平和はおとずれない」という言葉がありました。若い世代の僕たちが平和のために願うだけではなく行動しなければいけないことを改めて教えられました。人類を滅亡に導くだけの核兵器を廃絶するために、戦争を起こさないために、そして平和な世界になるように、まず身近なことから考えていきたいです。いじめ、差別をなくすために思いやりを持つ、広島で学んだことを周りに伝える、などできることはたくさんあります。小さなことでも必ず平和への一歩になると信じて行動していきたいです。

忘れてはならないあの日の惨劇

開成中学校２年
田村　芳之助

１９４５年、８月６日、人類史上初である原子爆弾が投下されました。上空６００ｍで炸裂した原子爆弾通称「リトルボーイ」は、いつもと変わらぬ穏やかな日常を一瞬にして地獄に変えてしまったのです。

僕は、７９年たった今年松本市の代表として広島平和記念式典に参加させていただきました。そこで学んで印象に残ったことを、３つ紹介させていただきます。

１つ目は、被爆体験者の講話です。今回講話していただいた方は「山瀬潤子」さんという方です。山瀬さんいわく、当時自宅で買い物へ行く準備をしていた所、急に外が光り目の前に扉が吹っ飛んできたそうです。様子を見に外へ出ると向かいの家の薬屋さんが二の腕から血が滝のように流れ出しており、「助けてくれぇ、助けてくれぇ」と叫んでいたそうです。そして、その子供は建物の下敷きになって気を失っていたそうです。このように山瀬さんの見た光景は聞いているだけでも恐ろしいのに、想像を絶する恐怖だったのだろうと感じられました。

２つ目は、原爆の話とは少し離れますが、江田島旧海軍兵学校で学んだことです。ここでは、東郷平八郎の遺髪や山本五十六の遺言、その他江田島海軍兵学校を卒業した方々の、手記や腕時計、双眼鏡等様々な物が展示されていました。その中でもかなり印象に残っている物は、特殊潜航艇という真珠湾攻撃の時海底に沈んでしまった潜水艦があり、その中にあったキューピー人形です。顔がへこみ、体は黒ずんで目がギロッとしており、見ていると体が重くなるような感覚で、言葉は悪いですがどこか気味が悪かったです。ちなみに、この特殊潜航艇の搭乗員は二人で天皇陛下からの指令は絶対に渡さないという執念から捕まりかけた時、指令の書いてある手紙と共に深海へ沈んでいったそうです。なのでこの方達の魂が宿っているのかもしれないと思いました。

３つ目は、平和記念資料館で見た原爆の真実です。今まで僕は、原爆が落とされた時しか、死者や苦しむ人々がいないのだと思っていましたが、実際は違いました。全身火傷を負った身体にはケロイドができ、見た目が気持ち悪いと差別されたり、４、５年後にはがんや白血病など人様々な後遺症が残りました。

こういった後遺症を『原爆症』といいます。

僕は、今回体験させていただいた学習で、今まで知ることのなかったことが分かりました。二度と核兵器が使用されない平和な世界をいつか実現させたいです。

平和じゃない時間

女鳥羽中学校２年
赤羽　咲月

私は、今回の学習で初めて広島へ行きました。平和についてのディスカッションをしたり、広島平和記念式典に出たり、原爆ドームを見たり、広島平和記念資料館を訪れたり、被爆者の方のお話を聞いたり…。原爆のことや、平和について、じっくり考えることができた３日間でした。そして、そんな中で私の心に留まったことを２つ、お伝えしようと思います。

１つ、原爆の威力について。なんと原爆が炸裂した直下の地面の温度は３，０００度から４，０００度、そこから半径２キロメートルは燃えるものはすべて燃やしつくされ、更に燃えはせずに、爆風で倒れた建物もありました。閃光と鼓膜が破れるような音もしたそうです。そしてそれが人に対して使用されたという事実が、とても衝撃的でした。

そして１つ、広島平和記念資料館で見たもの。資料館には、被爆した方々の写真や持ち物などが、たくさん展示されていました。見るに堪えない被爆者の背中、放射線を浴びて紫色の発疹ができた兵隊、被爆者の想いが連ねられた文章、そのどれもが「死にたくない。苦しい」と私に訴えかけてくるようで、居心地があまり良くありませんでした。

一番に印象に残っているのは炭になったお米が入ったお弁当箱でした。きっと誰かに作ってもらったであろうお米以外何も無い、でもお米がたくさん入ったお弁当を食べられずに亡くなった持ち主。そしてそのお弁当を作った人の気持ちを考えると、とても悲しかったです。原爆の直下で焼け死んだ人々、放射線を浴びて亡くなった人々…みんな、そのときにこの世から居なくなる理由なんて無かったと思います。しかし、人生なんて何かの気まぐれ。今回の学習では、私が今生きているのはただの偶然だということ、そして私がどれだけ今幸せなのかということが分かりました。このことを家族や友だちに伝えていきたいです。

ヒロシマを繰り返さないために

明善中学校２年
堀越　元太

僕と戦争の出会いは小学校６年生のときでした。

家族旅行で沖縄県に行き、ひめゆりの塔を訪ねました。資料館には沖縄であった地上戦、ひめゆり学生隊の方の遺品などが展示されていました。それを見た時、僕は戦争が恐ろしいものだと衝撃を受けました。

それから約２年、ひめゆりの塔の資料館で見た戦争の風景を思い出し、「沖縄だけでなく、広島の戦争についても学んでみたい」そう思い、僕はこの事業に参加させていただきました。

この事業で、特に戦争や核兵器の恐ろしさについて感じられたことを２つお伝えします。

１つ目は、被爆者の山瀬さんによる被爆体験講話です。

山瀬さんは被爆時８歳で、爆心地から約２．２ｋｍ離れた自宅で被爆されました。隣に住む女性の腕から血が吹き出していて、子供を抱きながら「助けて、助けて」と叫んでいた、そんな光景が忘れられないと話していました。

２つ目は、平和記念資料館です。

ボロボロになった衣服、放射線を帯びた黒い雨の跡が残った白壁、原爆によって亡くなった学生が着ていた制服などの展示品のほか、写真や絵なども当時の悲惨さを物語っていました。

資料館を訪れ特に驚いたのが、原爆によって亡くなられた方は約１４万人で、その中には日本人だけでなく、外国人留学生や、米軍の捕虜の人も含まれていることです。原爆によって無差別に人の命が奪われたことを改めて感じました。

今、世界では約１万３千発分の核兵器があり、その核兵器は、広島・長崎で投下された原爆よりも威力が高いといわれています。

その核兵器をなくしていくために、自分のできることからやる、と山瀬さんも話していました。僕は、まず核兵器について学んだことを周りの人に共有し、核兵器の恐ろしさに対し、少しでも興味を持ってもらうことが大切だと思いました。

前述した２つの事のような悲劇が繰り返されないように、唯一の被爆国である日本に住んでいる人が、平和の大切さや、命の貴さについて考え続けることが大切だと思います。

日本では今、戦争がなく平和な生活を送れていますが、世界では戦争によって苦しい生活を送っている人がたくさんいます。

私たちは戦争のない世界にするために、「平和」について考え続け、実現させなければなりません。７９年前のヒロシマを繰り返さないように、戦争・核兵器について語り継ぐことが私たちの義務なのではないでしょうか。

平和に向かって

信明中学校２年
泉　和哉

僕は８月５日～８月７日の３日間、信明中学校の代表として、広島平和記念式典に参加させていただきました。今回の事業に参加し、見聞きしたことは、僕の心に強く残るものばかりでした。

今から７９年前、１９４５年８月６日８時１５分１７秒、その瞬間、原爆が広島上空で炸裂しました。

僕が見学させていただいた資料館には、被爆した方が着ていた服や写真、手紙など、多くの資料がありました。

広島に落ちた、たった一発の原爆の威力はすさまじいもので、そこに生きていた人も建物も、跡形も残らないほどに破壊し尽くしました。

原爆は炸裂したとき、約３，０００度～４，０００度の高熱を放ちました。将来にさまざまな夢を抱いていたはずの多くの子どもたちや、その子どもたちを応援するために一生懸命に働く大人たちが、一瞬で死んでしまったのです。その時、人々のなかには体がドロドロに溶けてしまう人もいたそうです。

原爆は高熱だけでなく、放射能も放ちました。その放射能の影響で、未だに後遺症や、いわれのない差別に苦しんでいる人もいるそうです。

８月６日、広島平和記念式典には、僕たち日本人以外に、外国の方々もたくさん参列していました。外国の方々の中には、核兵器を減らすようにと、呼びかけをしている人たちもいました。

今、地球上に核兵器はまだまだたくさん残っていて、その数は約１２，０００発もあるそうです。

原爆は、たった一発でこんなにおおきな被害を出す、多くの人を苦しませ、死なせてしまう。これは絶対にあってはならないこと、絶対に繰り返してならないことです。

今、世界中の多くの国々で、原爆を減らすよう努力していますが、僕が原爆を減らすためにできることは、自分がこの耳で聞き、この目で見てきた広島の様子を、周りに伝え、広めることです。

被爆者の方の遺族や原爆を体験した人たちも原爆の悲惨さを語り継いでくれています。

核兵器を減らしていくために自分にできることを考えるのは難しいことですが、今、自分が知っている核兵器のことを周りに伝えることで、少しずつかもしれませんが、世界中に広がるかもしれません。

僕の小さな発信では誰にも届かないかもしれませんが、発信しなければ、誰かに届くその可能性はゼロです。発信し続ければ、いつか誰かに届くかもしれません。

「この地球上から核兵器がなくなり、世界に平和が訪れてほしい。」

世界中の人々がこのように望んでいると僕は信じています。

地球上から核兵器が消え、この世から戦争が無くなり、すべての国と国、人と人がつながりあえるその日まで、僕は僕なりの発信を大切にしていきます。

僕たちのするべきこと

会田中学校２年
小口　結翔

１９４５年８月６日８時１５分に一つの原子爆弾で広島の街は恐怖と絶望に落とされました。

僕は原爆が投下されて７９年後の広島に会田中学校の代表として行ってきました。１日目は、ヒロシマ青少年の集いに行ってきました。そこで、被爆体験者の山瀬潤子さんのお話を聞いてきました。その原爆が落とされた後の当時の様子を、絵を通してその悲惨さを教えてもらいました。その絵は、原爆の熱を浴びて、皮膚が垂れ下がり、手を挙げながら逃げていく人たちの絵でした。その絵を見てあまりの悲惨さに、僕は目を疑いました、こんなことが起きたことが信じられませんでした。

原爆資料館では、想像を超える展示品がありました。時間が８時１５分で止まった時計、黒く焦げた弁当箱、ボロボロになった服、黒く形の変わった三輪車、座っていた人が影になった石段、資料館でも原爆を落とされた後の絵をいっぱい見ました。やけどを負った人が、川に入って川にたくさんの死体が浮いている絵や放射線に蝕（むしば）まれた雨を飲む人の絵など、数多くの展示品に僕は言葉では言い表せられない気持ちになりました。

江田島旧海軍兵学校では、戦艦や特攻隊員の遺書や遺品など栄光と悲惨に彩られた日本海軍の歴史を知るだけでなく、日本人としての誇りも改めて考えさせられる展示でした。

この３日間を通して、僕はたくさんのことを学びました。実際に見るのと聞くのでは、その戦争や原爆の悲惨さの感じ方が、全然違いました。そして、今こうして僕たちが何も変わらず、平和にしている今も、ウクライナとロシアの戦争のように世界中で戦争や紛争が起きています。しかも、ロシアは核兵器の使用もちらつかせています。１９４５年８月６日のあの広島で起こった出来事が今、この瞬間にも繰り返されそうとしています。だからこの事実を世界中の一人一人がしっかりと理解し、受け止め、この悲惨な出来事を絶対に繰り返さないように行動し努力していくことが大切です。

僕はこの貴重な３日間の体験で、戦争の恐ろしさや原爆の悲惨さを改めて痛感しました。

僕は、実際に現地に行って感じた、貴重な経験を決して、忘れずに多くの人たちに伝えていきたいです。そして、僕の話を聞いた人たちがそれぞれの思いを持って、考えていく人たちが増えれば、広島で起きた悲惨な出来事が繰り返さないと思います。

僕もこれからは、この経験をもとに自分自身に何ができるのか考えていきたいです。

平和になるために

安曇中学校２年
髙田　希星

昭和２０年、８月６日、午前８時１５分に一つの原子爆弾によって１２月末までに約１４万人が亡くなったといわれている。その約８０年後、僕は初めて広島を訪れた。

広島に到着した１日目は、被爆者である山瀬さんのお話を聞いた。

「広島でこんなことがあったというのに世界ではまだ、核兵器を所持している国があります。」

広島で悲惨なことがあったというのに、今でも核兵器を所持している国があるのだ。この事実には驚きを隠せない。核兵器の所持数はロシアが１位、それにアメリカ、中国と続いている。イギリスやフランス、インド、パキスタンまでもがいまだに核兵器を所持しているのだ。

被爆者の方は、被爆当時の記憶を話すことができない人もいるそうだ。そんななかで、山瀬さんのように被爆の実体験を語ってくれる人がいる。とても貴重な話を聞かせてくれたなと思った。

２日目は、広島平和記念式典に参加して、実際に原爆ドームや、広島平和公園内にある「平和の灯」を実際に見てきた。原爆ドームを間近で見てみると、とても大きくて迫力があった。被爆地にとても近かったのに、原爆ドームは完全な倒壊を免れている。

３日目は、広島平和記念資料館を訪れた。僕が心に残っているのは、ぼろぼろになった衣服だ。原爆の恐ろしさが衣服に表れていてとても恐怖を覚えた。ほかにも大やけどを負った男性や女性の写真も展示してあった。あまりに痛々しくて見てられなかった。広島にあった原爆の事実を若い世代は知らないといけないなと改めて感じた。

原子爆弾の被害は尋常なものではなかった。爆心地の島病院の上空６００メートルで爆発した原爆は、爆発と同時に温度は数百万度になり、空中に火球ができた。火球から放出された熱線は地上に強い影響を与えた。爆心地周辺の地面の温度は３，０００から４，０００度になったといわれている。これが、熱線による被害だ。熱線のほかに、爆風による被害、火災、そして放射線による被害があった。原爆が爆発した瞬間、周りの空気が急激に膨張して爆風が起こった。そして熱線によって発火し、火災が発生。爆発後は、広島に長時間にわたって残留放射線を地上に発生させた。この放射線にあたった人は今も、後遺症に悩んでいる。

瞬間的な苦しみだけでなく、長い間人々を苦しめる核兵器は、もう二度と絶対に使ってほしくない。そのためには若い世代の我々が広島であった出来事を世界に発信し続ける必要があると感じた。広島での３日間は、僕にとってとても貴重な体験になったと思っている。

平和は本当に当たり前？

梓川中学校２年
上嶋　杏菜

１９４５年、８月６日、午前８時１５分、たった一発の原子爆弾により、たくさんの尊い命が亡くなりました。原子爆弾の落とされる数分前までは、今まで通りの平和な日常をおくれていたのに、たった数分にして黒く焼きつき灰色の街となりました。

７９年経った今、昔では想像もできないくらい活気であふれ、明るい街となっています。今ではこんなに、明るい街が昔は街の影もなくただただ真っ黒で、周りを見わたすと海が見えてしまうほど、焼きつくされていたなんて私は信じられませんでした。

１日目の被爆者の方のお話では、聞いているだけでも、苦しい、辛い話で絶対に、話している側も悲しく、辛いはずなのにそれを、はっきりと若者たちに伝えてくれる姿から、昔のことなのに、今でもこんなに苦しんでいる人がたくさんいるということが伝わってきました。

２日目の平和記念式典では、世界各地から来た方々と共に、黙祷（もくとう）を捧（ささ）げました。沢山の方が平和に関わり戦争の悲惨さを知ることにより、平和を願う様子は、私の心に残りました。

けれども私が一番心に残っているのは、３日目の平和記念資料館でした。資料館では、原爆の威力そして被害の様子が、写真、遺品、遺言、後遺症などで飾られていました。これまで、原爆、戦争のことについては、授業などやってきていたけど、実際に、見てみたり話を聞くというのは初めてで、本当にそんなことが存在していたのか、と実感は、湧きませんでした。当時その日、その場所に生きていたわけでもないのに、私自体もショックを受けたのです。原爆を受け、沢山の死者がでるそんな中、生き残り、それでも目の前で大切な人を亡くし、実際に今では考えられないことが起こっていて、その写真、話を見て、言葉にできないほど、痛く、苦しかっただろうとそんなことが感じられました。また、原爆の放射能で原爆症、多くの場合、白血病になったそうで、高熱や嘔吐（おうと）、歯茎からの出血などの症状で、当時では、不治の病として知られていました。そして原爆当時は、無事だったけど今になって、白血病やがんが発症する場合もあるそうで、当時は安心していたけど、まさか、今になってくるとは思わないという人が多いと資料や話からも感じられました。

他にも、当時の小学生の残した言葉や遺品を見ました。中身が入ったままのお弁当箱、焼けた衣類、それらを見ているうちに、これは私たちに「もう核を使わないで、戦争なんてやめて」とまるで語りかけているようでした。もうこれ以上見続けたくないと思うほど痛々しく、ざんこくな展示がたくさんありましたが元々平和だと思っていた日本が歩んできた道ということを思い知らされました。

広島に行かなければ、ただただ広島にすごい原爆が落とされ、たくさんの人々が悲しい思いをしたと軽く知るだけで終わっていたと思います。実際に行くことで、戦争の怖さだけでなく今まであまり深く考えなかったことを、考えたり、色々な面で成長できたと感じています。

現在の日本は、戦争のない平和な生活ができていますが、私たちが知らないだけで世界では、戦争によって苦しい生活をしている人がたくさんいます。

　戦争をしても誰一人と幸せになれないこともこの広島の体験により分かりました。

　私たちは、戦争のない世界にするため「平和」について、今私たちにできることを深く考え次の若い世代に伝えていくことが大事だと私は考えます。

曾祖父の思いを受け継いで

波田中学校２年
スミス　輝

僕の曾祖父は、今から７９年前の１９４５年８月６日、アメリカ軍が原子爆弾を広島に投下したあの日に、広島にいたそうです。曾祖父は当時、軍の自動車部隊に所属していて、爆心地から離れた山奥で作業をしていたその時に、きのこ雲を見たのです。原子爆弾が投下され、あたり一面焼け野原になった場所で、曾祖父は亡くなった人たちを集めて焼いたのだと祖父から聞きました。

僕は今回、広島に行って、曾祖父が体験したことを、自分の目で確かめたいと思って参加しました。僕にとっての戦争とは、罪のない沢山の人々が殺されてしまう悲しい出来事だと思っていました。しかし、戦争はただそれだけではないことに気が付きました。今までの僕の想像をはるかに越えたものがそこにはありました。

その中でも特に印象に残っているものは、人影の石です。この石は、近距離で原爆がさく裂して、逃げることもできないままその場で亡くなった人の影が残ってしまったものです。ここから僕は、一瞬の苦しみで亡くなった人の跡は７９年経った今も残っているということに深く胸を打たれました。

２つ目は、死の斑点が出た人の写真です。写真に写っていたこの人は被ばくを受けた兵士で、放射線の症状によって水が飲めなくなってしまったり、のどの痛みが出てしまったりするなどの症状が出たそうです。僕はこのことから、この人は亡くなるまで苦しみ続けたのかと思いすごく怖かったです。また、その人の顔に斑点が残り続けるのも嫌だなと思いました。

いつも通りの日常を過ごしていた人たちが、たった一つの原子爆弾によって、一瞬にして多くの人々の命が奪われてしまったのです。僕の曾祖父もその一人で遠くで帰りを持つ家族のもとへ、一日でも早く帰ることを望んでいたはずなのに…それが、一瞬にしてそのすべてを奪い去ってしまったのです。

今回僕が目にした辛さはほんの少しかもしれません。しかし、この辛くて悲しい事実は、変えることができないのです。そのため、このことは次の世代へと伝えていく必要があると思うことができました。「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」の言葉の通り、これからの世界が平和な世界であり続けるように願いながら生きていくことを決意しました。

被爆者の方のお話を聞いて

鉢盛中学校２年
中尾　一華

「１９４５年、８月６日の午前８時１５分。その時、天気は快晴でした。この時は誰も、原爆が落とされるだなんて想像もしてませんでした。」と、被爆体験証言者の山瀬潤子さんから聞いた、お話です。被爆時は８歳で、私は「そんな小さい頃に被爆体験したんだ…。」と、衝撃をうけました。元々、広島に３５万人いましたが原爆が落とされて１４万人が亡くなりました。１５％が放射線、３５％が熱線、５０％が爆風で亡くなったそうです。体に破片が刺さったり、着物の柄が体にくっついたり、大火傷を負って皮膚がただれたりなど聞いただけでも、とても痛々しかったです。

そして、先程の山瀬さんのお話では、学校では一級上の３年生と一級下の１年生は学徒動員の日で、３５３名と引率教師１６名が被爆死したそうです。元々の、学徒動員数は８，２００名のうち被爆死した生徒数６，３００名の多くの子供の命が、奪われてしまったのだと、切ない気持ちになりました。もう助からないと思った学徒動員の人達は校歌を歌い出したそうです。その時山瀬さんは、家でいきなりピカッと光りドーンと強烈な爆音と爆風を受けたそうです。山瀬さんは、「自分の家の上に爆弾が落とされた！」と思ったそうです。そして外に出てみると広島全体は、焼け野原になっていて言葉も出なかったそうです。そしてしばらくすると、隣の薬屋の小母さんが出てきて二の腕より血を噴き出しており、その息子のＴ君が目にガラスが刺さっており、後に失明し半身半傷を負いケロイドが残ったそうです。その後、あたりが薄暗くなり三輪トラックで運ばれる負傷者達がいて、その中で手遅れな人もいれば、まだ少し動いていたりする人もいたそうです。トラックなどに乗れなかった人達は行列になって比治山からゆっくりと降りていて、そうすると、「気違いが横行しています。気を付けてください」と連呼している人がいて、山瀬さんは怒りと悲しい気持ちで溢(あふ)れたそうです。その話も私は、すごくショックをうけました。「そんな酷いことを言う人が居るんだ…」と驚きもありました。

もう１つ、原爆資料館に行き入り口のところに１枚の女性の写真が貼ってありました。顔の左頬にタオルのようなものを顔にくっつけて右腕はギプスをつけていて服はボロボロです。そして、資料館に入ると私はあまり見ることができませんでした。原爆で亡くなった方の服や私物など、たくさん並べてありました。壁には、応急処置されている人の写真が飾ってあったり死体の写真やイラストがありました。子供の写真の横にご家族の方の言葉が書いてあったり、亡くなった方の顔写真の横に言葉が書いてあったり下に遺品があったりしました。私は途中、一人で回るのが辛くなり友達と回りました。たくさんの物を見ました。やはり戦争は、やってはいけないと思いました。

戦禍を知る

信州大学教育学部附属松本中学校２年
足立　礼実

原子爆弾が広島の街から数え切れないほどの尊い命と笑顔を奪ってから７９年経った８月６日。私は７９年前には絶望に埋め尽くされた地に立っていた。その日何が起きたかを学び、二度とその惨劇を繰り返さないために。

厳かな静寂の中に平和の鐘の音が響き渡っていた。閉じた瞼（まぶた）の裏に浮かんだのは、前日の講話で伺う限り想像しうる惨状だった。被爆によって傷つき苦しむ人々、焼け尽くされて跡形もなくなった街。その地獄のようだとも形容される情景は、当時を知らない私には想像し難いものだった。そして当時の苦しみを知る方々の高齢化は進み、原爆が引き起こした惨禍を伝える人々は減り続けている。

それでも、被爆体験を今でも語り続ける人たちがいる。８月５日、講話をしてくださったのは、あの日、爆心地から２．２ｋｍのご自宅で被爆された山瀬潤子さんだった。

実際に被爆した方の口から語られる惨状の中には、小さな犠牲が溢（あふ）れていた。もちろん、講話の中で語られた原爆による被害は信じられないほど大きく、全てが破壊され、ただただ残酷だった。しかし、山瀬さんが被爆した当時、そばにあったのは、映画やドキュメンタリーのような劇的な何かではなく、身近な人の死や苦しみだった。

私は広島を訪れる以前は、８月６日の悲劇を「原爆が広島にもたらした被害」として、一つの悲惨な史実として捉えていた。しかし、初日の山瀬さんの講話の中にも、最終日に訪れた平和記念資料館にも、一つの大きな出来事の中で、知ろうとしなければ霞（かす）んでしまい知ることのなかった一人一人の生きた証があった。戦時中の苦しみの中、ささやかな喜びを見つけて明日を生きようとしていた人々がいた。大切な家族との再会を待ち望む人々がいた。当たり前の幸せを求める人々がいた。そして、それらの人々の輝かしいはずだった未来を一瞬にして奪い去ってしまったのが原子爆弾だった。

７９年前広島に生きた人々の身に起きたことの数々を知ったことで、私の考えの中で何かが変わった。

今もなお、膨大な数の核兵器を保有する国があること、罪なき人々が戦火に巻き込まれていること。以前は、自分にはまるっきり関係ないと恐れることもしなかったこの世界の現状が、もっと自分のそばにあるように感じて恐ろしくなった。どれほどの尊い命が脅かされているのかと思うと胸が締め付けられる思いがした。

私は、戦争や原爆によってもたらされた悲劇を知った今、戦争によって脅かされた人々や今もなお平穏を手にすることのできない人々に思いを馳（は）せている。

戦禍を知ること、それは平和の尊さを知り、平和を愛することだと思う。そうして、人々が平和を愛し、この世界に恒久平和がもたらされる日のために、私たちはあの夏のヒロシマを忘れてはならない。

私たちの使命

才教学園中学校２年
花岡　麻貴

１９４５年8月6日8時１５分、広島に一つの原子爆弾が落ちました。家ごと吹き飛ばすほどの爆風、鼓膜を破るほどの爆音、ものすごい強い放射線、熱線が広島を一瞬にして覆い尽くし、多くの命を奪いました。

私はあの日から７９年経った今年、広島へ訪れました。本当に７９年前に原子爆弾が落ちたのかと思うほど写真で見た風景と違っていて、美しい街並みが広がっていました。しかし、原子爆弾が落ちたことは事実であり、街を歩いてみると原子爆弾の爪痕がいくつも残っていることが分かりました。

私が印象に残っているのは、被爆体験者である山瀬さんのお話と広島平和記念資料館です。山瀬さんは当時８歳の時に家で被爆したそうです。外に出てみるとたくさんの人が血まみれで助けを求めていたそうで、その情景を想像するだけで心が痛みました。皮膚がただれている人。腕や頭から血を流している人。そのような人たちの写真や絵を見ることで当時がどれだけ悲惨な状況だったのか知ることができました。

平和記念式典には世界中から人が来ていました。日本人だけでなく世界各国の方々が平和について考えられるこの機会はとても大切だと思いました。広島市長の平和宣言や平和への誓いを聞いて「戦争は絶対にしてはいけない」とあらためて感じました。

広島平和記念資料館では原子爆弾の威力や当時の写真、亡くなった方々の遺言や遺品、放射線による後遺症についてのことなどが詳細に書かれていました。特に記憶に刻まれているのは、被爆した方々の写真です。写真で実際に見るのは初めてで強い衝撃を受けました。全身に大きな火傷をしている少年、背中がケロイドになってしまった人の写真などは目を背けたくなりました。また、生き残った人たちも後遺症だけでなく心に大きな傷を負ってしまうということを知りました。生き残った人たちは自分が生きているということに後悔をしているというのには驚きました。生きているのに後悔をするほど、原子爆弾や核、戦争は全てを奪ってしまうものなんだと身にしみて感じました。

私は今回の体験を通して、原子爆弾や戦争の恐ろしさ、悲惨さを知ることができました。身近にできる周りに対する思いやりも全員が持つことで平和への第一歩になると思います。また、実際に被爆をしているわけではないけれど、被爆者の方々の話やここで感じたことや学んだことを周りに発信し続けることが私の使命だと思います。

世界平和の実現

松本秀峰中等教育学校２年
髙野　ゆあ

７９年前の８月６日８時１５分、広島に一発の原子爆弾が落とされました。

中学２年生の夏休み、僕は広島平和記念式典参加事業に学校を代表して参加しました。８月５日から７日までのこの２泊３日で広島の戦争に関係する様々な場所を巡るこの旅。被爆体験を生で聴くことや、広島平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式、平和記念式）に参加することができるこの旅で、核や平和について学んできました。

広島駅に着き昼食を取り、最初に向かったのは、「ヒロシマ青少年平和の集い」の会場です。ここでは被爆体験を聴き、全国から集まった中高生と意見交換をしました。今回被爆体験を語ったのは山瀬潤子さん、今年で８７歳。当時は８歳でした。山瀬さんは爆心地から２．２キロメートルで被爆。山瀬さんの家族も８人中６人が被爆しました。外はきのこ雲によって薄暗くなり、比治山（広島市にある山）からは、負傷者が下りてきました。中には足が使い物にならず木の枝をついて降りてきた人もいたそうです。道には生きているのかも分からない負傷者を乗せた三輪車が通っていたといいます。また、熱線による火傷が化膿し、悪臭で寄ってきた蠅（はえ）や蛆（うじ）をピンセットで取り除いたそうです。山瀬さんは「ピンセットがあっただけマシ」だとおっしゃっていました。２．２キロメートルでも大変大きな被害が出ているというのに、爆心地ではどのような被害が出ているのか想像もつきません。現在被爆者の高齢化に伴い、被爆体験を聴く機会も減ってきている中、ここでの体験は非常に貴重な体験で、原爆のこと、戦争のことを深く考える良い機会となりました。

２日目は朝から広島平和記念式典に参加しました。会場付近には大勢の警察官がおり、会場に入る前には手荷物検査がありました。多くの人がおり、外国人も多く見受けられました。６日は７９年前と同じ、晴れの日でした。会場にテントはあったものの、屋内ではなかったため、とても暑く、大量の汗をかきながら話を聴いていました。プログラムは、献花や一分間の黙祷、平和への誓いなど、例年行うものと変わりませんでした。特に印象に残ったのは、こども代表の平和への誓いです。中でも、大きく力強い声で言っていた「本当にこのままでよいのでしょうか」という言葉に、僕の心は大きく動かされました。

現在核爆弾を保有している国はロシア、アメリカ、中国、フランス、イギリス、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮の９か国。中でもロシア、アメリカは各５，０００発以上の核爆弾を保有し、それは世界の９割ほどの数。これらは再び世界に恐怖を与えるものとなります。それは絶対にあってはならないことです。だから、唯一の被爆国である日本こそ、核兵器廃絶に向け、世界平和に向け、動かなければならないのではないでしょうか。

過ちを世界が繰り返さない為に

松本国際中学校２年
横山　太一

７９年前、緑豊かで多くの人々でにぎわっていた商店街に、一発の原子爆弾が投下された事により、そこにいた沢山の人々の人生を狂わせました。

その数日後には長崎にも核が落とされ大きな被害をもたらしました。当時被爆し志半ばで亡くなっていった方々はきっと「何故、自分達なんだろう。こんな理不尽に殺されるのは嫌だ。もっと生きたかった。」と思ったでしょう。

この様な想像を絶する苦しみを受ける人がこの日本、世界からいなくなるために、もう二度と核兵器が使用されないようにと日本は歩み続けてきました。平和記念式典を広島で開催したり、若い世代の人々に核の恐怖をつたえるために、被爆者の方から話を聞くことの出来る機会を設ける等をし、そのお陰もあり日本国内では、核兵器へのマイナスイメージは等に若者から高齢者まで広がったと思います。僕も前述した２つのイベントに松本市の平和学習の一環で参加し、他にも原爆ドームや原爆資料館に訪れ、当時の状況やその詳細について学ぶことができました。そこで僕は目を背けたくなる様な現実が本当にあったんだと、とてもショックを受けました。当事者では無いのにも関わらず、本当に悲しくなりました。だからこそ、より一層頑張ろうと思いました。この様に国内は核廃絶に向けた全体の意識は高まったと思います。しかし、海の向こうに目を向けてみましょう。僕は平和学習の少し前にアメリカに約一週間滞在していました。正直な所、日本程核兵器に対する危険意識が低いというか、核を一つのエンタメとして扱っているとも感じました。そんなままで良いのでしょうか。あんなにも恐ろしい人類の負の象徴をエンタメとして取り扱っているそんな現実が有っていいのでしょうか。答えはもちろんノーです。だからこそ、唯一の被爆国日本はこのままではいけません。国内は良しとして世界には未だ千発を越える核弾頭を保有している国が沢山残っています。この事実だけでも恐ろしいのにも関わらず、その国の一つが現在進行形で戦争をしており核による威嚇をし続けています。

これからの日本には、たった一つの被爆国としてノーモアヒロシマ・ナガサキを掲げ核保有国とその他核をもたない国々の人々に核の恐ろしさと凄惨さを伝えていかなくてはいけません。そして政府は一はやく核兵器禁止条約に参加する事を決定し、ロシアやアメリカなどの超大国の圧におされず、むしろそういった国に抗議し、そして協力して世界から核を一発残らず廃絶するように歩んでいって欲しいと思っています。自分達や未来の世代の人達のためにも、この美しい地球を守るためにも今の我々が手を取りあって明るい未来を作っていこうと思います。

最後に、核廃絶に向けて、自分達にできることを、時間がかかっても良いから一つずつこなしていこうと思います。

広島訪問

松本ユース平和ネットワーク　信州大学　経法学部　２年
照屋　規翔

私は、松本ユース平和ネットワークの一員として広島を訪問いたしました。私自身、沖縄県糸満市という、第二次世界大戦で日本軍とアメリカ軍が激しく戦った沖縄戦の「最後の戦地」として知られる場所で育ちました。その影響もあり、小さい頃から戦争に関心を持っており、今回の広島訪問に至った次第です。

８月６日の朝、広島平和記念公園に向かい、式典に参加いたしました。広島市長をはじめ、日本の首相、地域や遺族の代表の方々が花を献上されており、遺族の悲しみや平和を願う気持ちを強く感じました。その中でも、広島市長の平和宣言の中での「争いを打ち消すためには、音楽、美術、スポーツを通して価値観を共感・共有していくことが大切」という言葉が印象に残っております。スポーツで言えば、パリオリンピックでの卓球の表彰式で、韓国と北朝鮮の選手たちが一緒に記念写真を撮っている光景が記憶に新しいです。昔から、両国はさまざまな歴史を背負い、お互いを警戒し合っておりますが、スポーツの場ではそのような背景に関係なく、一人の人間として、友人として交流している光景に感銘を受けました。このような場面はパリオリンピックでも多く見られ、なぜ国同士が攻撃や警戒をし合うのか、不思議に感じました。

３日目には、原爆資料館を訪問いたしました。自分の知らなかった原爆の悲惨さや、原爆が投下されるに至った経緯について知ることができて良かったです。見学を通じて多くのことを学びました。まず、原爆を投下した米爆撃機「エノラ・ゲイ」に搭乗した１２人が、日本に向かう際に撮影された写真で、搭乗員全員が笑っていたことに驚きました。彼らは、自分たちが原爆でどれほどの悲惨な結果をもたらすかを知らなかったのか、それともアメリカの勝利を確信していたのか、後者でなければ納得できないほどに驚きました。当時の状況など細かいことはわかりませんが、とても恐ろしく感じました。

次に、外国人の意識の高さにも感銘を受けました。２日目の式典でも感じましたが、平和記念公園には多くの外国人が訪れていました。資料館内では、各国の言語に対応した音声ガイドを耳に装着し、一つ一つの展示物に対してゆっくりと時間をかけて見学していました。式典の際にも、慰霊碑の前で深くお辞儀をし、心の底から戦争の悲惨さを痛感し、平和を願っている方が多くいらっしゃいました。どの国の方かはわかりませんが、日本も第二次世界大戦で多くの国を侵略し、悲しみをもたらしました。それにもかかわらず、その日本・広島を訪れ、戦争について学んでいる外国人の姿に感謝と感銘を覚えました。日本人もまた、日本の戦争につ

いて詳しく学び、発信していく必要があると考えました。

そして、今回松本市の代表として参加をした中学生たち。式典や原爆資料館、旧海兵学校でも積極的に自分から学ぼうとしており、素敵な一面が見られたと思います。戦争のことや平和について深く考えることはとても難しく、当時の自分なら「戦争が起こらなかったらいいや」と軽く済ませていたかもしれません。僕もまだ２０歳になったばかりでこの世の中のことは全く知らないですが、興味のある分野や必ず知っておかなければならないことには、松本の中学生のように自ら進んで学んでいきたいと思いました。

今回の広島訪問では、多くのことを学びました。現在でも世界中で核実験が行われていることや、核を保有している国が多く存在することを再認識しました。今回は主に原爆について考える機会となりました。私自身を含め、ユースの方々や各中学校の代表者の方々には、学んだことを胸の内に秘めるのではなく、友人や周囲の人々に戦争について話してほしいと思います。今の私たちにはそれくらいしかできないかもしれませんが、この小さな積み重ねが多くの人々に影響を与え、後世にも伝わっていくと思います。過去は変えることはできませんが、その過去を受け入れ、未来につなげて生きることが大切だと思います。日本が犯してしまった過ちの歴史、日本に起きた悲惨な出来事をこれからも学び続けていきたいと思います。そして、７９年前に起こった広島原爆で犠牲となられた方々、そして今なお後遺症に苦しむ方々に、心からのお見舞いを申し上げます。そして原爆から７９年経った広島は、「平和な街へと発展しており、私たちも幸せに暮らしております」とお伝えしたいです。貴重な体験をありがとうございました。

７９年の時を超えて、記憶を未来へ繋ぐ

松本ユース平和ネットワーク　松本県ケ丘高等学校　国際探究科　2年
滝沢　葵

私は、現在戦争の記憶をどのように次世代に伝えていくかというテーマで探究活動を行っており、ブラッシュアップするため今回ユースとして参加し、広島の地をより深く感じることができました。

式典では、原爆ドームの無言の訴え、そして二度と核兵器が使われることがないようにという平和への願いが、私の心に深く響きました。式典後、ある被爆者の方から直接お話を伺う機会があり、その体験談に心を揺さぶられました。ご自身の被爆体験だけでなく、平和への願いを次の世代へと繋いでいきたいという強い思いを語られていました。その言葉は、私が探究している「戦争をどう伝えるか」という問いに対する一つの答えを示唆しているように感じました。

平和記念資料館には、７９年前の惨劇を物語る資料がたくさん保存されています。特に印象に残ったのは、被爆者の写真の数々です。写真からは、当時の惨状、そして生き抜こうとする強い意志が非常に強く伝わり言葉よりも雄弁に物語っており、胸が締め付けられました。また、平和公園内のレストハウスにて拝見した東京大学の庭田さんの白黒写真をＡＩを用いてカラー写真にするという研究は、大変興味深く、ＡＩ技術の進歩によって、過去の出来事をより鮮やかに、そして身近に感じることができるようになっていました。この技術は、次の世代に引き継ぐための新たな可能性を開くものだと確信しています。

発展した広島の街を歩いていると、７９年の時が流れ、街は大きく成長していることに気づかされました。しかし、原爆ドームや平和記念公園、当時の施設に関する看板など、過去の記憶を刻む場所も数多く残されています。この対比に、私は複雑な感情を抱きました。復興を遂げた広島の姿は希望を与えてくれる一方で、戦争の傷跡が徐々に薄れていくことへの一抹の不安も感じました。

今回の広島訪問を通して、私は「戦争を伝える」ということの重要性を改めて認識しました。それは、単に過去の出来事を伝えるだけでなく、未来の世代に平和の大切さを語り継ぎ、戦争の悲惨さ、平和の大切さを忘れないために必要不可欠なことだと考えます。広島の取り組みは、７９年という長い年月をかけて、平和都市として着実に歩みを進めてきたことを示しています。しかし、同時に、記憶の風化や、被爆者の方々の高齢化など、課題も山積みです。被爆者の方々のお話や、平和記念資料館での学び、そして庭田さんの研究から得られた知見は、私の探究活動に大きな影響を与えました。

今後は、今回の広島訪問の経験を踏まえ、ＡＩ技術を活用し、戦時中の白黒写真をカラーにして再現し、写真を教材として、地元の学校や地域団体で平和学習を実施したり、展示を行い、若い世代に戦争をもっと身近に感じてもらい後世に伝えていけるような探究を進めて平和な世界の実現に向けて貢献していきたいと考えています。

平和とは

松本ユース平和ネットワーク　松本県ケ丘高等学校　自然探究科　2年
二木　琥央

私たちは８月５日から７日までの３日間、６日の広島への原子爆弾投下の日に合わせて広島へ訪問しました。

１日目、全国１３自治体の中学生、高校生が参加するヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。被爆体験証言者の山瀬潤子さんからお話を伺いました。彼女は国民学校３年生、８歳の時に爆心地から２．２㎞の地点で被爆したそうです。広島に落とされた原子爆弾がどのようなものなのか、また、原子爆弾投下後の状況を詳細に教えていただきました。テレビなどの音声や映像で淡々と説明されているものを見聞きするよりも引き込まれ、ずっと感じるものがありました。なので、実際にお話を聞くということは未来に被爆体験の証言を伝えるためにも重要なことだと思いました。また、「地元が経験した戦争をどう伝えるか」、「核兵器をなくすために自分たちができること」これら２つをテーマにディスカッションを行いました。私は事務局としての参加だったので見学のみでしたが、参加者の皆さんは地元が経験した戦争について詳しく知っている様子でした。

あったことを知ってもらうためにＳＮＳを活用するという意見が多く見られました。しかし、自分から調べてもらわないと発信した情報を得ることができないので、興味を持ってもらうきっかけとなる機会を作る必要があるので自治体、あるいは国で動いてほしいと思いました。

２日目、広島平和記念式典に参列しました。私はこども代表のお二人の平和への誓いの「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」という言葉が心に強く残っています。平和を願い、声に出すことは簡単だと思います。しかし、実際に行動に移さないと世界は変わらないし、そこが難しいと感じました。また、この式典中に会場外から野次が聞こえてきたことも印象に残っています。自分の意見を公の場で主張することは平和であるからこそできることだと思いますが、原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念する場でやるということに憤りを感じました。

３日目、広島平和資料館を見学しました。資料ですら、拒むような恐ろしさなのにこれを実際に見た人がいると思うと悲しいです。また、放射線を浴びることで出る死の斑点、原子爆弾の熱線による熱傷が原因のケロイドや原子爆弾により豹変（ひょうへん）した街の様子などの展示を見てあまりの残酷さから胸が締め付けられるような苦しさがありました。

この３日間で貴重な経験をし、平和とは何なのか再び考えさせられました。私は、どこかでこんな言葉を聞いたことがあります。「広島が最初の被爆地であることは永遠に変わらないが、長崎が最後の被爆地であり続けるか否かは人類の努力に掛かっている。」本当にその通りだと思います。現在でも、ウクライナではロシアによる侵攻が続いており、核兵器の使用をほのめかしていて予断を許さない状況が続いています。私たちは、この問題の解決法を考え、実際に行動していく必要があると思いました。

写真記録

８月５日（月）

ヒロシマ青少年平和の集い

８月６日（火）

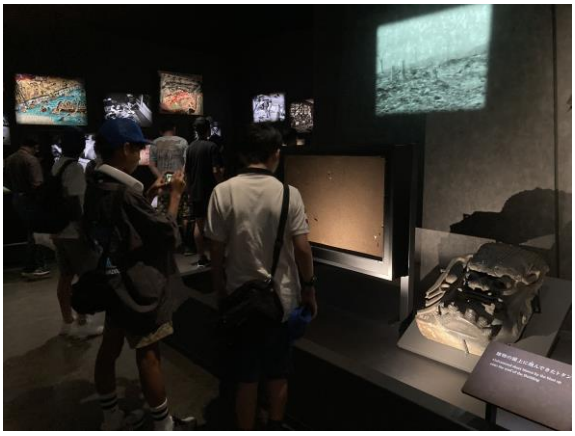
広島平和記念式典

平和記念公園見学（原爆ドーム・原爆死没者慰霊碑・折鶴献呈）

江田島旧海軍兵学校

8月7日（水）

平和記念資料館見学



平和への誓い

目を閉じて想像してください。
緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。
７９年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和２０年（１９４５年）８月６日　午前８時１５分。
「ドーン！」という鼓膜が破れるほどの大きな音。
立ち昇る黒味がかった朱色の雲。
人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。
ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。
原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。
言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、７９年経った今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。
今もなお、世界では戦争が続いています。
７９年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、
明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。
本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。
色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。
「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。
仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。
私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。
平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。
そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和６年８月６日

こども代表　広島市立祇園小学校　６年　加藤　晶
広島市立八幡東小学校　６年　石丸　優斗

平　和　宣　言

皆さん、自国の安全保障のためには核戦力の強化が必要だという考え方をどう思われますか。また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか。ロシアによるウクライナ侵攻の長期化やイスラエル・パレスチナ情勢の悪化により、罪もない多くの人々の命や日常生活が奪われています。こうした世界情勢は、国家間の疑心暗鬼をますます深め、世論において、国際問題を解決するためには拒否すべき武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていないでしょうか。こうした状況の中で市民社会の安全・安心を保つことができますか。不可能ではないでしょうか。

平和記念資料館を通して望む原爆死没者慰霊碑、そこで祈りを捧げる人々の視線の先にある原爆ドーム、これらを南北の軸線上に配置したここ平和記念公園は、施行から今日で７５年を迎える広島平和記念都市建設法を基に、広島市民を始めとする平和を願う多くの人々によって創られ、犠牲者を慰霊し、平和を思い、語り合い、誓い合う場となっています。

戦後、我が国が平和憲法をないがしろにし、軍備の増強に注力していたとしたら、現在の平和都市広島は実現していなかったのです。この地に立てば、平和を愛する世界中の人々の公正と信義を信頼し、再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという先人の決意を感じることができるはずです。

また、そうした決意の下でヒロシマの心を発信し続けた被爆者がいました。「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」これは、全身焼けただれた母親のそばで、皮膚がむけて赤身が出ている赤ん坊、内臓が破裂して地面に出ている死体…生き地獄さながらの光景を目の当たりにした当時１４歳の男性の平和への願いです。

１９８９年、民主化に向けた市民運動の高まりによって、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊しました。かつてゴルバチョフ元大統領は、「われわれには平和が必要であり、軍備競争を停止し、核の恐怖を止め、核兵器を根絶し、地域紛争の政治的解決を執拗に追求する」という決意を表明し、レーガン元大統領との対話を行うことで共に冷戦を終結に導き、米ソ間の戦略兵器削減条約の締結を実現しました。このことは、為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できることを示しています。

皆さん、混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、こうした先人たちと同様に決意し、希望を胸に心を一つにして行動を起こしましょう。そうすれば、核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはずです。必ずできます。

争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで「信頼の輪」を育み、日常生活の中で実感できる「安心の輪」を、国境を越えて広めていくことです。そこで重要になるのは、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し、共感し合うことです。こうした活動を通じて「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。特に次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと「友好の輪」を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、「希望の輪」を広げていただきたい。広島市は、世界１６６か国・地域の８，４００を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和意識の醸成に一層取り組んでいきます。

昨年度、平和記念資料館には世界中から過去最多となる約１９８万人の人が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への関心、平和への意識が高まっていることの証しとも言えます。世界の為政者には、広島を訪れ、そうした市民社会の思いを共有していただきたい。そして、被爆の実相を深く理解し、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という平和への願いを受け止め、核兵器廃絶へのゆるぎない決意を、この地から発信していただきたい。

ＮＰＴ（核兵器不拡散条約）再検討会議が過去２回続けて最終文書を採択できなかったことは、各国の核兵器を巡る考え方に大きな隔たりがあるという厳しい現実を突き付けています。同条約を国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として重視する日本政府には、各国が立場を超えて建設的な対話を重ね、信頼関係を築くことができるよう強いリーダーシップを発揮していただきたい。さらに、核兵器のない世界の実現に向けた現実的な取組として、まずは来年３月に開催される核兵器禁止条約の第３回締約国会議にオブザーバー参加し、一刻も早く締約国となっていただきたい。また、平均年齢が８５歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆７９周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、改めて被爆者の懸命な努力を受け止め、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。皆さん、希望を胸に、広島と共に明日の平和への一歩を踏み出しましょう。

令和６年８月６日

広島市長　松井　一實

参加者一覧

参加生徒

学　校　名	氏　名	学　校　名	氏　名
清水中学校	原（はら）　朋彰（ともあき）	明善中学校	堀越（ほりこし）　元太（げんた）
鎌田中学校	輪湖（わこ）　翔多（しょうた）	信明中学校	泉（いずみ）　和哉（かずや）
丸ノ内中学校	手塚（てづか）　航（こう）	会田中学校	小口（おぐち）　結翔（ゆいと）
旭町中学校	辻（つじ）　結貴（ゆうき）	安曇中学校	髙田（たかだ）　希星（きせき）
松島中学校	丸山（まるやま）　珠奈（じゅな）	梓川中学校	上嶋（かみじま）　杏菜（あんな）
高綱中学校	遠藤（えんどう）　咲絵（さきえ）	波田中学校	スミス　輝（ひかる）
菅野中学校	牧野（まきの）　朱音（あかね）	鉢盛中学校	中尾（なかお）　一華（いちか）
筑摩野中学校	関（せき）　大地（だいち）	信大附属松本中学校	足立（あだち）　礼実（れみ）
山辺中学校	土屋（つちや）　春太郎（はるたろう）	才教学園中学校	花岡（はなおか）　麻貴（まき）
開成中学校	田村（たむら）　芳之助（よしのすけ）	松本秀峰中等教育学校	髙野（たかの）　ゆあ
女鳥羽中学校	赤羽（あかはね）　咲月（さつき）	松本国際中学校	横山（よこやま）　太一（たいち）

松本ユース平和ネットワーク

所　属	氏　名
信州大学　経法学部　２年	照屋（てるや）　規翔（のりと）
松本県ケ丘高等学校　国際探究科　２年	滝沢（たきざわ）　葵（あおい）
松本県ケ丘高等学校　自然探究科　２年	二木（ふたつぎ）　琥央（こお）

事務局

所　属	役　職　等	氏　名
清水中学校	教　諭	住吉（すみよし）　彩花（あやか）
梓川中学校	教　諭	川俣（かわまた）　隼也（じゅんや）
平和推進課	主　事	村上（むらかみ）　萌（もえ）

旅の日程

	時　間	項　目	備　考
8月5日（月）	6:15	松本駅自由通路へ集合	受付
	6:20	出発式	
	7:04～9:18	松本駅　⇒　名古屋駅	しなの2号
	9:41～11:57	名古屋駅　⇒　広島駅	のぞみ61号
	12:15～12:30	広島駅　⇒　昼食会場	徒歩
	12:30～13:15	昼食	
	13:15～13:30	昼食会場　⇒　広島県JAビル	貸切バス
	13:30～16:45	令和6年度 「ヒロシマ青少年平和の集い」	
	16:45～17:00	広島県JAビル　⇒　ホテル	貸切バス
	17:00頃	オリエンタルホテル広島　着	
	18:00～（予定）	夕食（ホテル）	
6日（火）	6:00～（予定）	朝食（ホテル）	
	7:10～7:30	ホテル　⇒　広島平和記念公園	徒歩
	7:30～8:45	広島平和記念式典	
	8:45～10:30	広島平和記念公園内見学	折鶴献呈
	10:30～11:00	広島平和記念公園　⇒　昼食会場	貸切バス
	11:00～12:00	昼食	
	12:00～13:30	昼食会場　⇒　江田島旧海軍兵学校	貸切バス
	13:30～15:00	江田島旧海軍兵学校見学	
	15:00～16:30	江田島旧海軍兵学校　⇒　ホテル	
	16:30頃	オリエンタルホテル広島　着	
	18:00～（予定）	夕食（ホテル）	
7日（水）	7:00～（予定）	朝食（ホテル）	
	8:00～8:30	ホテル　⇒　広島平和記念公園	徒歩
	8:30～10:30	広島平和資料館等見学	折鶴献呈
	10:30～11:00	広島平和記念公園　⇒　広島駅	貸切バス
	11:00～12:00	広島駅（お土産）	
	12:18～14:34	広島駅　⇒　名古屋駅	のぞみ24号 （車内で昼食）
	15:00～17:04	名古屋駅　⇒　松本駅	しなの17号
	17:10	解散式（松本駅自由通路）	

平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の願いである。
われわれは、平和を愛するすべての人々とともに、
核兵器の廃絶と戦争のない明るい住みよいあすの郷土
を願い、ここに「平和都市」の宣言をする。

昭和６１年９月２５日

宣言の趣旨は、世界恒久平和実現・核兵器の廃絶を願いとしています。
私たち松本市の「平和都市宣言」が力強い宣言となるよう、暮らしに根ざして、平和の願いを大きく、根強く、たくましく育て続けていくことが大切です。

ひろしま レポート

第34回広島平和記念式典等参加事業

2024.11

編集発行:松本市 総務部 平和推進課

松本市役所前庭に設置されている「平和の灯（ともしび）」

松本市では、松本市平和都市宣言の理念に基づき、一人ひとりが命を大切にし、永久に平和であることを願い、平和を創る取り組みを広げるため、「平和の灯」を灯しました。

この灯が市民の平和のシンボルとなり、多くの皆さんが命の大切さや平和の尊さを考え、平和の連鎖がより一層広がっていくことを願っています。